

サイド・オマール忌

名誉教授 横山 英

九月一日、オマール君の墓を守る会（世話人は園部宏子さん）の主催でサイド・オマール・ピン・モハメッド・アルサゴフ君の第三〇回法要が京都の圓光寺（左京区一乗寺小谷町）の墓前において営われました。

法要には、かつて東京でオマール君ら南方留学生の指導に当たられた上遠野寛子さん、京大医学部にあつてオマール君の治療に当たられた浜島義博氏、京都市国際交流協会専門委員の正藤廣三氏、修学院小学校児童など三〇人

余りが参加し、本学からは中野伍事務官と私の二人が出席しました。

法要前、古賀住職から、昨年九月以後、マレーシアの首相および駐日大使、オマール君の妹御およびその夫君アジス博士（現マレー大学副学長）、マレーシアからの短期留学生などの参拜があつたこと、また圓光寺近くの修学院小学校の児童がオマール君の墓があることを知り、墓参りに訪れて慰霊祭を催したことが紹介されました。



修学院小学校の早川幸世教諭によれば、これが機縁で修学旅行は広島へということになり、今年四月、六年生が広島に来てゲンバクについて学習すると共に、大手町の興南寮（南方留学生の寮、オマール君・ユソフ君はここで被爆）の跡の記念碑をたずねた由で、オ

オマールの墓

大東亞戦争が終つた昭和十八年六月当時の東條内閣の要請で、南方特別留学生の一入としてサイド・オマールは来日した。彼は大東亞共和国の同盟国であつたマレーシア・シヨホール州の名家の出身で、そのすぐれた資質は、人々の期待を返つていた。オマールは広島大学在学中、原爆に会い、昭和二十年九月三日、京都を休養の地としてここに眠る。十八才。東條内閣の要請で来日した留学生は、南方特別留学生と呼ばれ、昭和十八年・十九年の二年間だけであつた。

附記

修学院 東京に及ぶ途中京都で下車、京大病室に入院するも手首の甲斐なく一週間後に死亡。当時の市営墓地であつた南禅寺、大日山に埋葬された。昭和35年この事が週刊誌に掲載され、事情を知つた八瀬平八茶屋の主人が墓の訪問者数を基の建立を依頼、遺族の許可を得て昭和36年彼の命日の9月3日にイヌギ山麓の墓所を善光ある市民の協力のさとして建立。

マール君の墓が児童の視野をヒロシマ、核問題、東南アジアへと広げさせることとなりました。

写真に見るように、この度、オマール君の墓の由来を記した説明板が建てられました。